



# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、  
方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学講師、日本語教師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員

著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）

「おもしろ えちご塾」（恒文社）

「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」

（人間の科学新社・共著）

「明治大学政経論叢 2016年度（新潟美人）」（明治大学政治経済研究所）等

## 「学校の方言」

校則、制服、校歌、校風、怪談や伝承、と学校関連の話題には事欠きませんが、学校の方言というものがあります。

と書くとき読者のみなさまは「学校で方言なんか使うんだかね？校内は標準語でねえとだめじゃねんかね？」と思われることでしょう。しかし、しかしです！全国各地の学校には方言があり、方言学では「学校方言」と称されているのです。

これは話し手が「よもや方言とは知らず、共通語だと思って今まで使ってたてば、あきゃきゃ」といった、いわば「気づかない方言」のひとつであり、地域差を知るひとつのバロメーターにもなっています。

当たり前のことですが、方言はその地域社会のなかで使われるコミュニケーションツールです。児童・生徒は、そのほとんどが都道府県の市町村内の狭いエリアで学生生活を送るため、日々教室内や校舎でふつうに使用していることばは、「僕たち・私たちの共通のことば」として認識されています。それが、他県に転校、進学してから「これは方言？」と驚き、それに気づくことがあるのです。教育界では、都道府県にある教育組織が単位のため、こうした「学校方言」なるものが存在し、集団生活圏での共通言語ともなって使われています。

新潟県内各地でみられる方言のひとつに「先生にかけられる」の「かける」があります。共通語では「あてる」「さす」で、「指名する」の意味で使用されています。しかし、県内の教育現場では「あてる」派「さす」派よりも「かける」のほうが幅を利

かせているように、新潟の学校方言の代表格は「かける」といってもよいでしょう。

では、「かける」以外の県内教育方言をみてみましょう。共通語の「模造紙」（校内の掲示物でおなじみの大きな紙）は、県内では「たいようし」（富山県、山形県の一部も使用）で、某学校の配布資料には「たいようし」と活字化されていて、教師も連呼しているほどの普及率。試しにこちらが「模造紙」と口にすると、怪訝な顔をされることがありました。

筆者が調べた中で最も不思議な響きの学校方言は「ラーフル」の「黒板消し」ですが、なぜか新潟市中心部と九州の一部で使用されています。文具関係者によると商品名であるというので、商品名が「教育方言」になった例ともいえましょう。

身につけるものにも学校の方言がみられます。校内で履く靴は、県内では「内履き」が主流なようですが、「上履き」も地域に点在します。なお、東北では内ズック・中ズック、関東は上靴、関西は上履きが主流というように、学校にはその地域独特の方言があるのです。

制服にしろ、校歌にしろ、校則にしろ、学校という限られた環境と、それを取り巻く地域のなかで使われる学校の方言は、集団生活や地域のなかの帰属意識を密にするといってもよいでしょう。新潟にみられる「教育方言」、まだまだいっぱいありますので、またの機会をお楽しみに！

ラーフル

